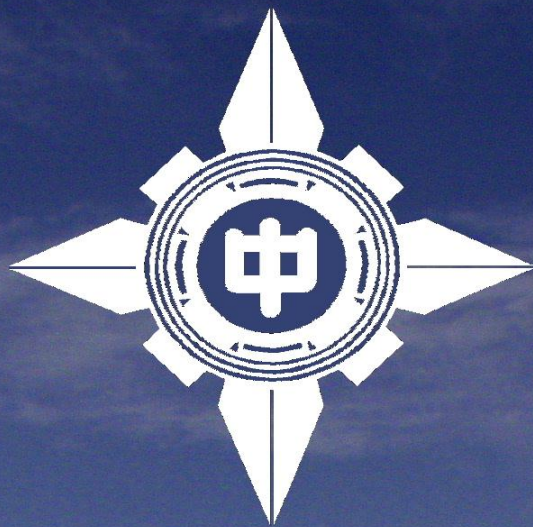


すべての生徒が安心して学べる環境の整備

～学習支援員を活用したきめ細やかな支援体制の構築～

真室川町立真室川中学校
教諭 河津 光



はじめに

- ・ 真室川町では「特別支援教育の充実」を重点施策として推進
- ・ 学習指導員・学習支援員を各校に配置し、切れ目のない支援体制を構築
- ・ 通常学級147名中46名(約3割)に個別の支援・指導計画を作成
- ・ 特別支援学級には知的・情緒・病弱の3学級、8名が在籍
- ・ 多様な教育的ニーズに対し、全教職員による組織的・一貫した支援が必要

実践の出発点

- ・ 放課後の全校学習会を企画したが、人員・時間の確保が難しく継続困難

↳ 現行のシステムをアップデートし

「無理なく、継続して取り組める仕組み」の構築を最優先に

- ・ 令和7年度に山形県教育局特別支援教育課より示された「特別支援コーディネーターハンドブック」

- ・ 特別支援コーディネーターとして

生徒の実態把握と情報共有を推進

学習指導員・支援員との連携を強化

個々の教育的ニーズに対応する校内支援体制の整備

が必要

～はじめて特別支援教育コーディネーターになった方へ～

特別支援教育コーディネーター 連携ハンドブック

このハンドブックは、小学校・中学校・義務教育学校・高等学校等の特別支援教育コーディネーターの参考となるよう、『発達障害を含む障害のある幼児児童生徒に対する教育支援体制整備ガイドライン～発達障害等の可能性の段階から、教育的ニーズに気づき、支え、つなぐために～』（文部科学省平成29年3月）を参考に作成しました。



山形県教育局特別支援教育課
令和7年4月

※このハンドブックは山形県ホームページに掲載されています。
(<https://www.pref.yamagata.jp/700027/tokubetusien/renkeihandbook.html>)



実践内容

新規 ／ 改善 ／ 継続 の取り組み

① 特別支援学級の運営改革

- ・「特別支援部」を立ち上げ、担当職員がチームで生徒に関わる体制へ
- ・ 障害種別の学級担任の枠を取り払い、チーム担任制で運営
信頼できる教員との関わりを継続
 - ↳ 年度初めの変化が多い時期も落ち着いて過ごせた
- ・ 週1回の特別支援学級担任会で、生活単元学習・自立活動・生徒情報を共有
- ・ 運営委員会・学年会を通して全校職員へ共有

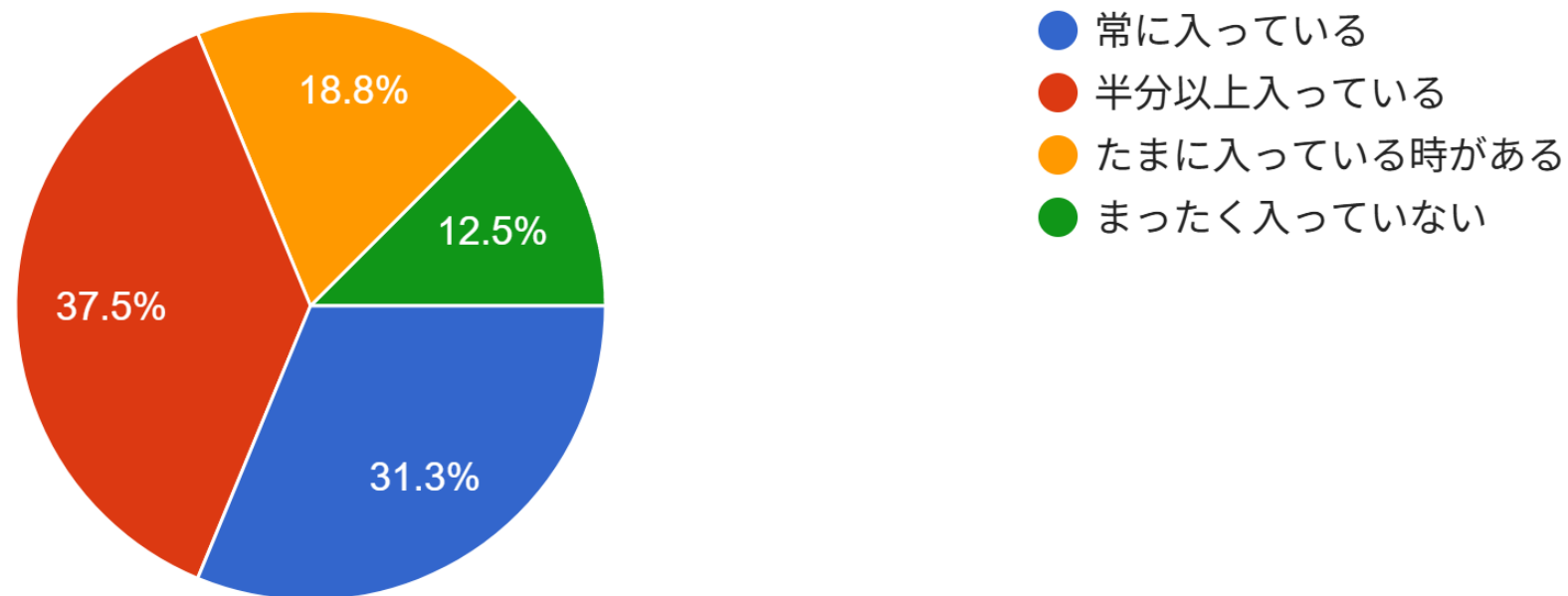
② 学習支援会議の設置



教科担任にアンケートを実施

授業に学習指導員・支援員はどのくらい入っていますか(受け持ち時数全体の割合)

16 件の回答



学習面

- 補足説明(語句の言い換え、口頭での指示の視覚化、日本語習得の難しい生徒への翻訳)
- 個別の声掛け(学習に向かわせる促し、課題や指示内容が理解できているかの確認)
- 活動の補助(作業の介助、生徒同士の会話を繋ぐアシスト)
- 確認(書字が整っているか、ワークシートやノートに必要事項を記入しているか)

生活面

- 見守り(業間や移動教室時など教員の目の届かない時間、刃物や火、薬品など危険なものを使用する時)
- 個別の声掛け(持ち物や提出物の確認、次の行動への呼びかけ)
- 活動の補助(給食準備や清掃場面での指導、行事中の付き添い)

業務関係

- 点検関係(学習プリント、提出物、小テスト)
- 環境整備(掲示物、教材や用具の整理整頓)

その他

- 授業中の見取りや、日常の気づきの共有をしてほしい。
 - 授業内容を打ち合わせたり、業務をお願いしたりする時間が取れない。
 - 生徒が「補助ありき」になってしまわないか不安。
-

支援改善のサイクル

観察

実際の授業・生活での様子を把握

見立て

困りの背景や有効な手立てを検討

実践

具体的な声掛け・支援を実施

評価

効果を確認し、次の支援へ

毎週1人ずつターゲット生徒を設定し、個別の指導計画を基に支援方法を改善

Aさんについて

目標:姿勢を整えて学習に向かうことができる。

指導方法:姿勢が崩れてきたら声掛けを行う。

観察

- ・ 学習内容が難しい内容になると姿勢が崩れ始め、最終的にうつ伏せになり寝てしまう。なんとか問題を解いた後も「1問しか当たらなかった…」などネガティブ発言があった。

見立て

- ・ 課題が難しいと感じたり、複雑な指示に混乱したりすると、気持ちが萎えて姿勢が崩れるようだ。気持ちが持続するように、良い取り組みをしているときには積極的に褒める声掛けを行ってみてはどうだろうか。

実践

- ・ 注意よりも「褒める」ことを重視して、「～しかできない」というネガティブな考え方をリフレーミングし、「自分で計算しようとできたね」「取り組みが早いね」などできていることを認める声掛けを行った。

評価

- ・ 課題を投げ出すことや取り掛からない様子が見られなくなり、姿勢の崩れも減ってきた。学習に向かう態度が良くなった。
-

Bさんについて

目標:授業中の離席をしない。(注意1回まで)

指導方法:活動や授業の流れを掲示し、見通しが持てるようにする。

観察

- 教科によっては授業が始まる前から顔を伏せている状況がある。その時は何度声をかけても学習に向かえない。授業の課題や活動の流れがわかりやすくなるように個別に声をかけるが、それを嫌がる素振りが見える。(まわりからどう見られるかを気にしている)
- Bさんが信頼を置いている先生の授業では離席が起こらず、取り組みが良い。

見立て

- 支援員による生徒への個別の声掛けには限界がある。Bさんとのつながりが深い教員から褒められたり、学習活動へ促す声掛けをもらえたりすると行動の変容が起こるのではないか。

実践

- 授業中の様子について、学年団や部活動の顧問の先生と共有し、良いところを積極的に褒める声掛けを行った。また、課題となっている部分も一緒に伝え、いろいろな人がBさんのことを気にかけていることを実感させていく。

評価

- すぐには効果が見られなかったなので、今後も継続していく。
-

情報共有で「チームの支援」へ

- ・学習支援会議の内容を情報共有シートにまとめ、校内運営委員会で共有
- ・支援員も個別の支援・指導計画の作成・評価に参加
- ・生徒の実態を多面的・多角的に把握し、支援方法を見直す仕組みを構築
- ・支援員自身にも「周りの先生を巻き込むことも支援」という視点の変化

③ 小学校との連携

- ・ 町内3校の小学校の巡回相談事業に参加 & 年に3回行われる町特別支援教育部会の中で、各学校の児童生徒や校種別の実情を共有
 - ・ 個別の支援・指導計画の様式を統一 → 年に2回必ず面談の場で作成と評価を本人・保護者とともに行う
 - ・ 小学校6年生の新入生説明会での本人と保護者、中学校特別支援学級担任との面談
-

④ ホワイトボードケース会議

- ホワイトボードケース会議の研修会
- 会議の進め方のフォーマットを用意することで、誰でも進行できるように
- 3年生の生徒2名について放課後や学年会の15分程度を使い継続的に実施



Cさんのケース

1回目(5/8)

【目標】連続して欠席しないようにする

【解決策】

- ・1週間の予定表を本人と相談して作成する…担任
- ・好きな教科の授業がある日に登校を促す…担任・養護教諭

【結果】短時間の滞在時間だったとしても、ほぼ毎日登校できるようになった。

2回目(6/29)

【目標】いろんな先生と関係性を持てるようにする

【解決策】

- ・登校したら職員室に行って報告させる…全職員
- ・給食の配膳を自分で行わせる…養護教諭

【結果】廊下で他の生徒に出くわすかもしれないという不安感から実施は難しかった。

3回目(7/29)

【目標】自分で立てた計画通りに登校できる

【解決策】

- ・1週間の目標を自分で設定させる…**学年団**
 - ・記録ファイルを作成し、計画が達成できたことを積極的に認めていく…**学年団**
-

Dさんのケース

1回目(5/1)

【目標】週1回の登校を継続できる

【解決策】

- ・登校時に楽しい活動を設定する(お茶会)…担任・養護教諭
- ・仲のいい友達との交流の時間を設ける…担任、コーディネーター

【結果】週に1度の登校を継続できるようになった。運動会に向けた活動に参加し、当日は保健室から参観できた。

2回目(7/1)

【目標】登校時の活動を教科の学習に移行する

【解決策】

- ・好きな教科でお試し実施…**教科担任**
- ・学習環境(教室や一緒に活動する仲間など)の調整…**学年団**

【結果】美術の課題に取り組むことができた。理科の元素記号カードゲームに取り組んだ。

3回目(7/29)

【目標】登校時の活動を5教科の学習に移行する

【解決策】

- ・時間割の調整…**教務**
 - ・教科担任と連携し、取り組みやすい課題を準備する…**担任、教科担任**
-

「小さな目標を積み重ねること」と「短時間で行うこと」を特に意識して行った。

- ↳ スモールステップで課題をクリアしていくことで成果が目に見える
生徒自身や担任の達成感、自己肯定感を高められる。
 - ↳ 一度の会議を15分程度に抑えることで多忙を極める日々の中でも該当するメンバーを招集して定期的に行うことができる。
-

(2) 改善を加えたこと

年5回の校内特別支援委員会

- 内容の見直し・・・年間計画に照らし合わせて実施時期や回数を変更
 - 全職員が参加する形式に変更
 - ・・・特別支援教育への意識の差や、特別な支援が必要な生徒の問題行動への解釈や指導方法を統一する
 - 個別の指導計画・・・指導や評価の方法を会議の中で定期的に確認
-

第1回校内特別支援委員会 4月実施

月	年間の予定	通常学級	特別支援学級
4	特別支援教育運営委員会①	支援の進め方、配慮生徒の理	支援計画完成
5		支援・指導計画 の作成	指導計画(1学期)完成
6	特別支援教育運営委員会②	支援・指導計画の共通理解	
7	22～28日(三者面談)	支援計画に承認のサインをもらう	指導計画評価(通知表)
8			指導計画(2学期)完成
9	特別支援教育運営委員会③	巡回相談の準備、相談したい生徒の確認	
10	特別支援教育運営委員会④	判定や所見の共有、支援の進め方確認	
11		年間の振り返り を記入	
12	16～21日(三者面談)	引継ぎのサインをもらう	指導計画評価(通知表)
1			指導計画(3学期)完成
2			
3	特別支援教育運営委員会⑤	来年度や、進学先へ引き継ぐかどうかの判断	指導計画評価(通知表)

目標と評価について (例)	△			○
	目標	漢字が書けるようになる。	具体的な数値目標に	2年生で習得する漢字を8割書くことができる。
	評価	毎日自学ノートに漢字を学習したことで、画数の少ない漢字から少しずつ書けるようになった。	結果を評価できるものを記入する	基礎基本テストでは68点だった。漢字の小テストでは平均7割正答した。→継続
	目標	クラスメイトと仲良く過ごすことができる。	具体的な行動目標に	苛立ちを感じた時に、暴言、暴力以外の代替行動ができる。(別室でクールダウン、クッションをたたく)
	評価	大きなケンカを起こすことなく、毎日元気に過ごすことができた。	具体的な行動を書く	教員が声をかけると、別室に移動することができた。→完了
	目標	具体物を使わずに計算し、グループの仲間にその計算方法について伝えることができる。	複数の目標を混在させない	具体物を使わずに、一桁の四則計算ができるようになる。
	評価	計算練習を頑張った。まだ難しいと感じている計算があるので、これからも継続して支援にあたる。	何ができて、何ができないか簡潔に	加法、減法、乗法はできるようになった。除法は補助具が必要。→継続

愛着障害の理解と支援の方法

してはいけない支援

感情に期待した対応

「どうしてそんなことをしたの？」

→自分の気持ち、相手の気持ちがわからない

むやみに褒める→どんな気持ちになっていいかわからない

叱る

→「この感情の時は、してはいけない」と分かる子供にだけ叱る指導が効果がある

要求にこたえる→同じ要求では同じ安心感が得られない、次の命令に従ってくれるかわからない不安で「命令エスカレート現象」に

関わる人が連携せずにそれぞれの思いで関わる



どの人が愛着対象かわからなくなり、刹那的な対応に



愛情試し行動



厳しい人がいると、そのしわ寄せが他の人に
(指導力がないからだ!!とならないように注意)

愛着が「1対1」で形成できるように、**周りの連携**が大切

誰かが「特定の人」 **キーパーソン**になる

特定の人と一緒に**感情のラベリング学習**を行い「誰と一緒に」だからその感情が生じたかを確認すること

キーパーソンがなんでも知っている状況を作る

子どもが欲しがる前に**先手で関わり**、キーパーソンが主導権を握る

対応を統一すること

情報をキーパーソンに集めること

第2回校内特別支援委員会 7月実施

- ・三者面談で保護者と本人に個別の支援・指導計画の内容を共有
 - ・生徒一人ひとりの支援状況や目標の達成度を確認
-

具体例：Eさんへの支援

- 個別の指導計画に「ルールを作る」「クールダウンの場所を設ける」と記載されていたが、実施されていない状況を確認
- 本人に分かりやすい約束カードと学習ルールを設定
 - ↳ スケールで体調・気持ちを確認し、自己理解を促進
- ルールを全職員へ配布し、誰でも同じ対応ができるようにした
- 自分から別室へ移動したり、教員へ困り感を伝えたりできるようになった

E さんとの約束		
気持ちレベル	どんなこと	どこでどんなふうに過ごすか
0	・落ち着いて学習できる。 ・ルールを守れる。 ・笑顔で友達と話せる。	教室でみんなと一緒に過ごす。
1 クールダウン が必要	・イライラする。 ・友達や先生から注意される。 ・学習に集中できない。	クールダウンのために支援室に行って、1時間休憩する。(20分ずつ3回使うなど工夫してもOK) <u>教科の学習をする、壁で横になる</u> など、自分の落ち着くことをする。 落ち着いたら教室に戻る。
2 いじめや犯罪 につながる	・人に嫌なことを言う。 ・「やめて」と言われても続けてしまう。 ・脅したり怖がらせたりする。	みんなと一緒にいられないので別室で過ごす。
3 命に関わる危 険なこと	・友達や先生をたたく、蹴る。 ・物を壊す。 ・危ないことをする。	■さん自身もケガをするなどの危険を防ぐために、おうちの人に連絡して早退する。 次の日は先生と振り返りをするので、みんなと別に過ごす。 反省したり、謝罪したり、解決するまではみんなと一緒にの教室に戻れない。

第3回校内特別支援委員会 9月実施

- 年に一度行われる町専門家チームによる巡回相談(スクリーニング)で、特に観察を要する生徒や助言を受けたい内容について学年で確認
 - 生徒一人一人について話す時間をしっかり取ったことで、1学期までの様子や担任の困り感を把握できた。
-

第4回校内特別支援員委員会 10月実施

- ・巡回相談のスクリーニングの結果を受けて

- ↳ 必要な支援や合理的配慮の検討

- 保護者への伝え方

- 関係機関にどのように繋げていくか等

} 今後の方向性を話し合った

第5回校内特別支援員委員会 2月実施

- 進級や進学を見据えて、実施した手立てによってどの程度成長や改善が見られたかを評価
 - 今後どのような方向性で支援をしていくと良いか、学年で話し合い
 - 個別の支援・指導計画に記載することで、その生徒に関わる人々が変わっても、有効な手立てを確実に引継ぐことができた
-

(3) 継続して取り組んでいること

適応支援員会

- ・ 週に一度開催
 - ・ 生徒指導主事を中心に、校長、教頭、養護教諭、特別支援コーディネーター、ソーシャルスクールワークコーディネーターやスクールカウンセラーなどが参加
 - ・ 学校生活や家庭の状況を共有し、今後の対応について多様な視点から検討
 - ・ 話し合われた内容は毎週運営委員会で共有
-

成果

- ・ 組織で対応することで生徒が抱える困難に早期に対応できた。
 - ・ 生徒を見取る視点や支援の幅が広がった。
 - ・ 小学校との連携によりスムーズに新年度の支援体制が構築できた。
 - ・ 生徒指導や授業づくりに特別支援教育の視点を取り入れ、生徒の一人一人に寄り添った関わりができた。
-

今後の課題

- ・ 個々の教育的ニーズに応えようとするとな人的配置が十分でないため、教職員の授業持ちコマ数に負担がかかる。
 - ・ システムの構築と同時に、校内研修等で正しい理解を促し、教職員の意識改革と専門性の向上を進めていくことも大切にしたい。
-

終わりに

- 「チーム学校」として機能する鍵は、職員・関係者とのきめ細かなコミュニケーション。
 - 正しい理解と多くの賛同を得ること背景にあるそれぞれの「思い」を共有しながら時間をかけて協力体制を築いていくことが大切。
 - 過去の成功体験や独りよがりの思い込みにとらわれず、目の前の生徒の実態を正しく捉え、専門家の意見を聞き入れながら柔軟に対応することが重要。
 - 特別支援教育に関わる情報や考え方を絶えず更新していきながら、周りを巻き込んで生徒が安心して学べる環境づくりを推進していきたい。
-

ご清聴ありがとうございました。

